

秋田 茂著

『イギリス帝国の歴史——アジアから考える——』

(中公新書 2167)

中央公論新社 二〇一二・六刊
B 40 二八八頁 八八〇円

本書は、三百年以上にわたるイギリス帝国の歴史を概観することと、グローバル化する世界に新たな視座を提供しようとする意欲作である。

本書の目的は以下の二点である。第一に、アメリカ中心で語られる現代世界の成立を、イギリス帝国史を通して再考することである。第二に、従来のイギリスによる帝国諸地域への政治的・経済的支配という負の側面を前提としながらも、イギリスが自由貿易体制という枠組みや国際公共財と呼ばれる便宜を提供することで、帝国内外の様々な国家や人々に機会や活躍の場を与えたという積極的な側面を明示することである。

全体は序章、終章を除く三章からなり、以下各章の内容を紹介する。

第一章では、十七世紀から十八世紀にかけての環大西洋世界とアジア世界への進出を通して、イギリス帝国の形成過程が描かれている。北米およびアイルランド入植から始まった国外進出は、西インド諸島での砂糖プランテーション開発および労働力確保のための奴隷貿易と結びつくことで、植民地間貿易網「大西洋の三

角貿易」を形成した。他方、イギリス東インド会社は十七世紀以降豊かなアジアでの交易に参入し、綿織物や茶といったアジア産品をイギリスへもたらした。これらはヨーロッパや環大西洋地域に再輸出された。十八世紀にイギリスを結節点として、アジアと環大西洋地域を結合した貿易構造がもたらした変化は商業革命と呼ばれ、これにより、イギリス重商主義帝国が成立したのであった。

第二章では、十八世紀末から十九世紀にかけてのイギリス帝国最盛期の実態を詳述している。十九世紀初頭、イギリスではナポレオン戦争と産業革命の影響により様々な保護主義的政策が見直された。十九世紀中葉以降、イギリス帝国は公式・非公式とも急速に拡大したが、そこでは自由貿易体制が基本的な枠組みとなった。これは産業部門よりも金融・サービス部門の利害に即したものであった。また、国際金本位制、世界規模の運輸通信網、国際法体系、安全保障体制など国際公共財を提供し、帝国内外の発展に寄与した。このように、十九世紀のイギリスは世界的な影響力を行使し得たヘゲモニー国家であった。

第三章では、二十世紀以後のイギリス帝国の再編・解体、そして影響力の低下について論じられている。第一次世界大戦以降、イギリスは軍事力・政治力を低下させ、グローバルな経済的影響力「構造的権力」がより重要性を増した。だが第二次世界大戦後、植民地を喪失し、それにつれて経済力も失った。そしてついに帝国は解体したのであった。

本書の意義は次の二点であろう。第一に、グローバル・ヒスト

リーの視点から、イギリス帝国が関係した広範な領域について有機的な関係性が示されている点である。第二に、イギリス帝国に関するここ二十年の研究成果がふんだんに盛り込まれている点である。初学者はもちろん、帝国論や植民地論に関心を持つ方々にも新たな発見をもたらす一冊であろう。

(谷口謙次)